

国

語

(二〇二四年度)

《注 意》

- 一 試験開始の合図があるまでは、問題用紙を開けてはいけません。
- 二 問題用紙は十五ページまであります。解答用紙は一枚です。
試験開始の合図があつたら、まず、問題用紙、解答用紙がそろっているかを確かめ、次に、解答用紙に「受験番号」「氏名」「整理番号」を記入しなさい。
- 三 試験中は、試験監督かんとうくの指示に従いなさい。
- 四 試験中に、まわりを見るなどの行動をすると、不正行為こういとみなすことがあります。疑われるような行動をとってはいけません。
- 五 試験終しゅうりよう了の合図があつたら、ただちに筆記用具を置きなさい。
- 六 試験終了後、試験監督の指示に従い、解答用紙は裏返して置きなさい。
- 七 試験終了後、書きこみを行うと不正行為とみなします。

次の文章を読み、設問に答えなさい。

コツコツコツ……。ユリ先生が黒板に文字を書く音を、みんなが黙^{だま}って聞いている。四月に入^いったばかりだが、校庭の桜は散り始めていた。

今日は学級委員を決める日だ。三年生になると、クラスで男女二人が学級委員として選ばれて、クラスをまとめる役割を担^たうことになる。立候補が一番優先されるが、誰^{だれ}も立候補しなかった場合は、他の人を推^{すい}薦^{ぜん}してもいいとユリ先生が話していた。

黒板には縦書きで「学きゆういいん決め」という言葉と、その左側に男子、さらに左に女子と書かれていた。

「はい、じゃあ学級委員だけど、男子から決めちゃおうか」

先生がこちらを振り返^ふる。守^{まも}は手のひらの汗^{あせ}をズボンで拭^{ぬぐ}い、手を挙げる準備をする。

「学級委員やりたい人！」

「はい」

思わず声^{こゑ}がうわずり、それを誤魔^{ごま}化^かすために守は手を挙げたまま軽く咳^{せき}をした。

「えっと、田口^{たぐち}守くんね」

クラス替^かえから一週間も経^たっていないなかったため、先生は座席表を見てそう言った。黒板の男子と書かれた下のスペースに田口守、と守のフルネームが書かれた。

「はい、田口くんは手を下ろして大丈夫^{だいじょうぶ}よ」

先生は守の方を見てニコツと笑い、立候補してくれてありがとう、と言った。

「じゃあ、他にやりたい人はいないかな。このままいなければ田口くんにやつてもらふことになるけど」

そう言^いって先生はクラスを見渡^{わた}した。①他に誰も出ないでくれ、という思いが、守の頭の中でぐるぐると回^{まわ}った。

20 — 学級委員、立候補しなさいね。

お母さんの言葉が蘇^{よみがえ}った。立候補はできたけれど、誰か別の人に決まってしまうたらと思うと、急に不安になる。

「はい！」

25 誰かが手を挙げたのがわかった。去年^{ちがう}違うクラスで、守が話したことの無い男の子だった。
「僕は山田達哉くんがいいと思います」

「え、推薦？ 立候補するんじゃないくて？」

「達哉くんはやさしいから、いい学級委員になると思います」

彼はそれだけ言つて座^{すわ}つてしまい、先生は困つたように笑つた。

「今は立候補の時間で、推薦はなしなの」

30 「僕も！」

別のところからも声上がる。先生に指されてもないのに、その子は話し出した。

「僕も達哉くんがいいと思います。みんなにやさしいから」

「ちよつと、推薦の時間じゃないつて言つたでしょ？ 推薦は立候補がない時に特別にやることなんだから」

それから先生は困つたように座席表を見渡した。

35 「山田、達哉くんね、山田くんは学級委員に立候補する気、ある？」

すると、達哉くんと呼ばれた男の子は座つたまま、笑顔^{えがお}で首を振つた。

「田口くんがやりたいんだから、それが一番いいと思います」

「そう？」

40 先生はどこかホツとしたような表情になり、他に立候補がいなかを確認^{かくにん}した。結局それから立候補は出ず、

守が学級委員をやることになった。女子は立候補する人がいなかったため、推薦で決まつた。しかし守を推薦してくれた子は、クラスに一人もいなかった。

けれどこれで、お母さんに怒^{おこ}られなくて済む。そう思いながら一日を終え、トイレに寄つてから教室に戻^{もど}ると、中から女子たちの a モリ上がる声が聞こえた。里中^{さとなか}さんという、毎日違う色のリボンを頭につけて取り巻きに囲

まれている女子のグループだった。

「美紗都^{みさと}、やれば良かったのに」

45 「えー？ 学級委員？」

話題が学級委員のことだとわかり、聞いていいのか分からず、守は少し廊下^{ろうか}に留^{とど}まることにした。

「だってびったりじゃん」

50

「確かにやりたかったんだけどー」

里中さんはピンク色のリボンを軽く触^{さわ}り、それから言った。

「だって男子、あの真面目メガネでしょ？ 達哉くんだったらなあ」

「ちよつと真面目メガネはピッタリすぎだつて」

55

それからクスクスと笑い声が続き、しばらく待っていると話題が移ったので、守は何事もなかったかのように教室に戻り、帰り支度^{じたく}をした。里中さんとは去年同じクラスだったが、陰^{かげ}で真面目メガネと呼ばれていることを、守は知らなかった。

60

家に帰ってから在宅勤務をしているお母さんの部屋をノックし、パソコンの画面に釘^{くぎ}付けのお母さんに、守は今日の出来事を報告した。無事に学級委員になれたこと、だけど男子は達哉くんを推薦する声が多かったことだけを伝え、真面目メガネと呼ばれていたことは黙^{もく}っておいた。

「そう。無事決まって良かった。私立入試と違って都立入試では内申^{※のなひしんてん}点も重視されるらしいから、学級委員やっていたら有利になると思う」

65

守と喋^{しゃべ}る時、お母さんはいつも真顔で、だから嬉^{うれ}しいのか悲しいのかが分からない。

「達哉くんが推薦された時どうしようかと思つて」

「やさしいからつて言われてたのね？」

「そう」

「じゃあ守、あんたもこれからみんなにやさしくしないとね。学級委員なんだから、誰か一人だけと仲良くしちやだめだよ」

70

パソコンを見ていたお母さんが、この時初めて守の目を見てくれた。

「②うん、わかつた」

「真面目があんたの取り柄^となんだから」

——あの真面目メガネ。

里中さんの声が頭の中で蘇^さり、けれど守はそれに気づかないふりをした。

「僕^が、頑張^ばるよ」

(中略)

75 宿舎長と一組のバスに乗っていた教頭先生のお話を聞いて入舎式を済ませ、これから泊まる部屋に荷物を置いた。

80 翔吾くんと唯人くんは、守が班長を務める班にいる。それは、守がこの二人と仲が良いからではない。この二人がクラスで仲が良い人がいないからなのだ。翔吾くんはクラスで避けられているし、唯人くんは教室ではいつも本ばかり読んでいる。守はクラスメイトのためになれるならと引き受けているが、翔吾くんはどうやら守とそこまで仲良くしたいわけではないらしい。こういうことで、守は傷ついたりしない。だって翔吾くんは達哉くんと仲良くしたくて、その達哉くんは林間学校に来られないのだ。代わりに守をあてがわれたとしても、嬉しいわけがない。

廊下から、早見先生の低い声が聞こえてきた。女子部屋は女のユリ先生、男子部屋は男の早見先生が担当するらしい。

85 「みんな荷物は置いたかな？ そしたら飯ごう炊さんの用意をして外に出てください」
外に行くと、出て右側の広場で飯ごう炊さんの準備が始まった。家にある炊飯器とは違う飯ごうにお米を入れながら、本当にご飯が炊けるのだろうかと思われぬような気持ちになった。火を起こすのは大変だからというのでカセットコンロが用意されており、ご飯を炊くのと並行してカレー作りもみんなをやった。

守の班は唯人くんと翔吾くんと、あとは女子が三人いる。カレーの具材は分担して持つてくることになっていて、守は玉ねぎ担当だった。工作の時間に牛乳パックを開いて作ったまな板に、材料を置いていく。

90 「あれ、にんじんは？」

他の具材は揃ったが、にんじんだけが見当たらなかった。

「にんじん持つてくるの、誰？」

95 そう班のみんなに問いかけたが、返事はない。仕方なくしおりを取り出して、事前に決めた分担を調べる。するとにんじんは翔吾くんの担当だった。

「忘れちゃった」

守に指摘されるのを見越してか、翔吾くんはそのタイミングでやっと名乗り出た。

「えー？」

「忘れたのー？」

100 女子たちが困ったように言った。守も困っていた。料理をすることすら不安なのに、材料が揃っていないなんて。なんでだよ、と怒ってしまいそうになるのを、守はグツと堪えた。

③ みんなにやさしいと言われている達哉くんだったら、こんな時どうするだろう。サッカーが下手な守にも、やさしくパスを出してくれる、やさしい達哉くんだったら。

「悪い」

105 そこまで悪いと思っていなさそうな翔吾くんに怒るのをやめ、守はじっと考える。にんじんがないのは仕方がない。けれどにんじんがないカレーになってしまうのは困る。どうしたらいいんだろう。

そこまで考えて、守は班のみんなに声をかける。

「先にご飯炊くのか、できることを進めてくれない？ にんじんはちよつと待ってて」

はーい、という声を背中に、守は他の班を回り始めた。

ピンク色の三角巾をつけた里中さんに、守はゆっくり声をかける。

110 「あの、にんじんちよつとだけくれませんか」

「え？」

里中さんの班はもう具材を切り終わっていた。

「うちの班、にんじん忘れちゃって、困ってて、ちよつとだけでいいから、くれないかな」

「えー？」

115 どうする、とヒソヒソ話が目の前で繰り広げられ、守は翔吾くんが忘れたのだと言ってしまいたくなる。けれど、守は学級委員だ。みんなにやさしくしないといけない。

「他の班からももうつもりだから、本当にちよつとでいいから」

本当はこの班から半分くらいもらえればいいなと思っていた。けれどこの反応を見る限り、たくさんもらうのは難しいだろう。

「じゃあ、ちよつとね」

120 里中さんはしようがないといった様子で、切られたにんじんを三切れくれた。

他の班にも同じように言って回り、どうにかみんなに行き渡る量のにんじんを集めることができた。自分の班に戻ると、みんなは他の具材を切り終わっており、ご飯も炊き始めていた。

「遅れてごめん」

自分が謝る理由はよく分からなかったが、守はそう言つてにんじんを差し出した。みんなは特に感謝する様子もなく、これで材料揃つたねと鍋に具材を入れ始めた。

「俺、にんじん嫌いなんだよな」

その時、翔吾くんが小さい声でそう言つたのを、守は聞いてしまった。苦手なにんじんを食べなくても済むように、翔吾くんはわざとにんじんを忘れたのだろうか。それを守が、勝手に他の班から集めてきてしまったのだろうか。やさしいつもりでやつたことなのに。

そんな考えが一瞬だけ過ぎつたが、守はそれ以上考えないことにした。

外がまだ明るいうちにカレーが出来上がり、それからご飯も炊き上がった。班ごとのいただきますをしてから口に入れると、自分たちで作ったからか、うちで祖母さんが作るカレーよりも美味しかった。けれどしおりにそんなことを書いたら祖母さんを悲しませてしまうから、守はその気持ちを誰にも話さなかった。

(中略)

九時から各部屋の班長が集まる反省会がある。反省会には班の人全員のしおりを集めて持って行かなくてはならない。

「十分後、僕が反省会にしおり持っていくから、みんなしおりは今日の記録のところ埋めといて」
「あーい」

みんなロッカーからしおりを持ってきて、今日の記録を埋めていく。守は昼間の記録を読み返した。

——切られた木から、血が流れているみたいなおいがしました。

あの時は勢いで書いてしまったが、これはちよつと怒られてしまう気がする。木から血は流れないのだから、ふざけていると思われそうだな。④そう思つて守は記録の文章を消しゴムで消した。代わりに「青々としたにおいがした」とユリ先生が言っていたことをそのまま書き込んだ。それから星空観察が楽しかったですと書いたが、守の本当の気持ちは、その文章を読んでも誰にもわからないだろうと思つた。

反省会はクラスごとに班長たちと担任の先生で行われた。里中さんのパジャマはピンク色でフリルが付いていて、守は自分のチェック柄が子供っぽく見えて少し体をb_バチ升めた。

全員分のしおりを集めてから、今日の出来事を担任の先生と話した。今日危なかったことや、怪我した人がい

150 なかったかなどを聞かれた。シャワーで沁しみみた小※⑥さなやけどのことを、守は特に話さなかった。他にも怪我をした人は特にいなかった。

「林間学校、先生も初めて来たからドキドキしていたんだけど、みんなが無事に過ごせて良かったです」

ユリ先生は心からそう思っているように言った。それから明日の予定を一通りしおりで確認し、最後にひとりずつ今日の思い出を発表することになった。

155 「自然がたくさんで面白おもしろかったです」「星空が綺麗きれいでした」「お母さんのお弁当がおいしかったです」そんな感想の後で守が話す番になった。

「班のみんなで飯いごう炊さんができて楽しかったです」

守はそう言った。木から血が流れているように思ったことや、飯いごう炊さんでみんなをみんなの班から集めたこと、星空観察で里中※⑦さんの譬たとえがとても素敵すてきだと思ったことは、どれも守の中では大きな思い出だったけれど、みんなの前で発表することはしなかった。

160 「じゃあ明日も予定はたっぷりだけど、みんな怪我しないように注意して一日を過ごしましょう」ユリ先生がそう言って、反省会が終わった。

部屋に戻るとすぐ消灯時間になった。夜更よふかしをしないようにと早見先生に言われたが、守たちは思った以上に疲れ切っていたようで、布団に入るとすぐに眠ねむってしまった。

(中略)

165 リュックを背負ってレジャーシートをみんながしまうと、色鉛筆いろえんぴつの黄緑色にそっくりな芝生しばふが一面に現れた。班ごとに一列に並んだのを確認して、ユリ先生がにっこりと笑う。

「みんなが集合してからすぐに静かになってくれたので、先生はとても助かりました。協力してくれてありがとうございます。午後は、しおりにもある通り写生会をします。早見先生が前から画用紙を配るので、一人一枚ずつ取って後ろに回してね」

170 渡された画用紙から一枚取り、守は後ろに回した。画用紙の少しざらざらした表面を、撫なでるように触ってみる。

「水彩すいさい絵の具は持ってきてるよね。そう、チューブと筆だけをゴムでcタバねて、筆洗いはペットボトルの下の部分だけを切り取ったやつをお家うちで用意してもらったよね。忘れたものがある人は後で先生のところに来てくだ

さい」

175 昼ごはんの時に確認したところ、守の班は完璧^{かんぺき}だった。少し得意な気分です。守は先生の目をじっと見る。

「描くものは自由です。自分が描きたいもののところでレジャーシートを敷いて、首かけの画板を使って描いてください。あ、でも一つだけ決まりがあります」

ユリ先生がポケットに入れていたしおりを取り出す。

180 「えっと、テーマは、⑤菅平の自然にしかないもの、です。だからたとえば近くに生えているお花とか、木を描いてみるとかね。学校では見られないものを観察して、絵にして持って帰りましょう」

それからユリ先生は、友達とは離れて座ることや、水は広場の端っこにある水道から持つてくること、先生から見えない場所までは行かないことなどを注意し、自由時間になった。

185 何を描こうかと広場を探していると、木の上の方から鳥の鳴き声でした。朝聞いたのとよく似た鳴き声で、けれど守にはそれがどんな鳥だかわからなかった。見上げると、名前も知らない鳥が羽ばたき、澄んだ青空をまっすぐに横断した。守の目は空に釘付けになった。守のマンションから見える空は、他の建物に四角く囲まれており、電線が何本も引かれている。けれど、すでに鳥がいなくなっているこの空を遮るものは、何もなかった。

守は広場の真ん中に走りだした。この空は、菅平でしか見られない。両手に収まらないほど大きな空を眺めながら、守は確信した。

190 水道で筆洗いに水を入れ、守は自分の場所に戻る。もう一度空を見上げ、この青はどうやったら表現できるだろうと思うと、自然とワクワクした。

——学校では見られないものを観察して、絵にして持って帰りましょう。

195 A【ユリ先生の言葉が頭をよぎる。この空を持って帰ることができたら、誰に見せたいだろう。一番に思い浮かんだのは、骨折してここに来られなくなってしまった達哉くんだった。】バスが発発する時、お母さんたちに紛れてみんなに手を振っていた、松葉杖をついた達哉くん。一ヶ月前に交通事故に遭って骨折してしまい、林間学校には参加することができない達哉くん。

B【画板を首から下げ、画用紙をクリップで留めた。大きな筆を取り出し、パレットに青と水色をちよつとずつ出して、水を加えていく。そうやって自分で作った青空色を、画用紙の真ん中から広げていく。達哉くんは今、どうしているのだろうか。

水色を少し足し、白の絵の具も取り出す。水に溶かして画用紙に薄く塗り重ねると、本当に空を持つて帰れるような気がした。」

自分が骨折してしまっただのに、翔吾くんを庇う達哉くんはやさしいと、守は思う。達哉くんは運動ができて、クラスの人気者だ。ただ運動ができるだけではない。運動ができる子は、運動ができない守のようなクラスメイトを邪険に扱うことが多い。けれど達哉くんは、運動が苦手なクラスメイトにもやさしい。守は達哉くんが誰かをいじめたり、そもそも誰かにつめたくしたりするところも見ることがなかった。

⑥守のやさしさと達哉くんのやさしさは、一体どこが違うのだろう。

——学級委員なんだから、誰か一人だけと仲良くしちゃだめだよ。

⑦お母さんの言葉が、守のやさしさの基準だった。誰か一人だけと仲良くしてはいけない。みんなにやさしくするためには、守は一人ではないといけない。けれど達哉くんは一人じゃない。友達がいながらも、他の子にもやさしくしている。

「……温度？」

空を描いていた筆の動きが、一瞬止まる。達哉くんと守のやさしさの違いは、温度なんじゃないだろうか。守のやさしさは、誰か一人と仲良くならないことで、ある意味でみんなを拒絶すること、誰にでも手を差し伸べることができる、つめたいやさしさだ。だから守には特定の仲の良い友達がいないし、自分はそういう友達を作ってはいけないと思う。けれど達哉くんのやさしさは、誰もこばまずみんなを受け入れる、あたたかいやさしさだ。

体温が高い人と低い人がいるように、やさしさの温度も人によって違うのだろう。守のやさしさにあるつめたさを見抜いてしまうから、翔吾くんは守をこばむのかもしれない。けれど、それでも良かった。守にはどんな温度であれ、やさしい人であることが重要なのだから。

——空と地面をひっくり返したみたい。

昨日の里中さんの発言を思い出し、青空を地面とひっくり返したらどうなるのだろうと守は考える。C「青空はよく見ると、薄い水色から青へのグラデーションになっていた。水彩絵の具を注意深く混ぜながら、守は空を画用紙に写しとる。」

そうして出来上がった青空は、結局画用紙の大きさに切り取ったので四角くなってしまうが、とてもよく描

けたと守は満足だった。

ユリ先生が、ちよつと聞いてください、とdカクセイ器越しに声を上げるのが聞こえた。守は顔をあげて、先生がいる方に目をやった。

「そろそろ描き終わった人もいます。絵が描けたという人は私か早見先生にチェックしてもらって、OKが出たら提出してください」

⑧裏に名前と題名書いておいてね、と先生は続けたが、守は自分の絵を見直すことに夢中になっていた。青空と絵を見比べながら、そっくりに描けたと嬉しくなる。

ユリ先生が話すのをやめたので、⑨守はテストが早く解き終わった時と同じように、画用紙を持ってユリ先生のところへ歩いて行った。

「できました」

そう言つて提出すると、いつも笑顔のユリ先生の表情が、みるみる曇つていくのが守にもわかった。

「あの、できたんですけど」

「ねえ田口くん、これ、画用紙を全部青く塗ただけじゃない。どういうこと？」

注意されることなんて滅多にない守は、言葉をうまく返すことができない。

「いや、これ、あの」

「先生、菅平の自然にあるものつて言つたよね？ それなのに何、これ。こんなの絵じゃないでしょう。画用紙を全部おんなじ色に塗るだけなんて。ねえ、いつも真面目な田口くんがふざけるなんてどういうこと？ 誰かにやれつて言われたの？」

先生の眉毛は困つたように下がっている。自分がいじめられているかのような先生の言い方に、守は思わず反論する。

「達哉くんが」

「何、山田くんがどうかしたの？」

「達哉くんはあつたかくて、でも、僕はつめたくて、だけどどっちも、やさしくて」

「何が言いたいのか？」

守の後ろに何人か並び始め、先生は困惑を隠せないようだった。

「う、うう」

250 ⑩ 気づくと、守は^{おおつぶ}大粒の涙を流していた。並んでいるクラスメイトが、守を遠巻きに見ている。

学級委員になってから、クラスメイトに涙を見せるのは初めてだった。学級委員になってからというものは、この行動は学級委員に^{ふさわ}相応しいのかを考えるようになって、先生に怒られないように、みんなにやさしくすることばかり気にしていた。林間学校に来てからだって、みんなに邪険に扱われても、荷物の準備を手伝った。

—— 守くんって、みんなにやさしいんだね。

255 唯人[※]くん[◎]にそう言われたこと、達哉くんのやさしさのこと、普段^{ふだん}は見られないまんなるの青空のこと、それを持つて帰って見せてあげたくなったこと、守と達哉くんのやさしさが違うこと……。絵の具の色を全部混ぜ合わせたみたいに、守の感情はぐちゃぐちゃの汚^{きたな}い色になってしまふ。先生にちゃんと説明しないといけないのに、守は一つも言葉にできない。

260 「やだ、ちよつと、ごめん。そんなつもりじゃ……。言い過ぎちゃったよね。ごめん、先生も今ちよつと[※]テンパ

つちやつて。いいよ、この絵で。うん。裏に題名だけ書いておいてね」

先生は慌^{あわ}てたようにそう言つて、守を解放してくれた。ポケットからハンカチを取り出して涙を拭^ふき、自分のレジャーシート^{レジャーシート}の場所まで戻る。

書いたばかりの絵の裏面に、「青空 三年一組 田口守」と書いた。

265 本当だったら「やさしいやつくんへ」と書きたかった。達哉くんの名前の漢字は、僕たちはまだ習つていない。

「あれ、やさしいって、どう書くんだろう」

そう考えたところで、守は「やさしい」という漢字の書き方をまだ習っていないと気づいた。やさしいの書き方を、三年生の僕たちはまだ知らない。知らない漢字を何年後に教えてもらえるのか、僕たちは知らない。

270 D 【やさしいという漢字を習^{しな}う頃には、さつきうまく言えなかった気持ちも、説明することができるようになるのだろうか。

これまで守は、世界には言つて良いことと悪いことの二つしかないと思つていた。先生や親に怒られるから言つてはいけないことが、守にはたくさんあった。けれど、まだわからないから言えないこともあるのかもしれないと、やさしいの書き方を知らないことで初めて気がついた。】

泣いてしまうなんて学級委員としては失格だったけれど、⑪守は晴れやかな気持ちだった。

(宮下みこと「やさしいの書き方」より)

〈語注〉

- ※①内申点：出身校から受験校に伝えられる評価のこと。
- ※②宿舍長：守の学年は東京から長野県にある菅平^{すがだいら}へ林間学校に来ている。宿舍長とは、林間学校が行われる宿舍の責任者のこと。
- ※③その達哉くんは林間学校に来られない：本文以前の場面に、翔吾くんの母親が原因で達哉くんは交通事故にあい、林間学校に参加できなくなったことが書かれている。
- ※④昼間の記録：中略部分（135行目）に、菅平の自然にふれた守が、その時に感じたことをそのまましおりに記録したことが書かれている。
- ※⑤星空観察：中略部分（135行目）に、みんなで星空観察をしたことが書かれている。
- ※⑥小さなやけど：中略部分（135行目）に、飯ごう炊さん中にできたらしいやけどに守が気づいたことが書かれている。
- ※⑦里中さんの譬え：中略部分（135行目）に、星空観察をした里中さんが「空と地面をひっくり返したみたい」と発言したことが書かれている。
- ※⑧グラデーション：色が少しずつ移り変わっているさま。
- ※⑨唯人くんにそう言われたこと：中略部分（164行目）に、学級委員として気を配る守に対して、唯人くんが「みんなにやさしいんだね」と言ったことが書かれている。
- ※⑩テンパっちゃって：「気持ちに余裕^{ゆゆう}がなくなっていて」という意味。

〔設問〕解答はすべて、解答らんにおさまるように書きなさい。句読点なども一字分とします。

一 ― 線①「他に誰も出ないでくれ」(18行目)とありますが、守がそのように思うのはなぜですか。説明しなさい。

二 ― 線②「うん、わかった」(68行目)とありますが、守はどのようなことがわかったのですか。説明しなさい。

三 ― 線③「みんなにやさしいと言われている達哉くんだったら、こんな時どうするだろう」(101行目)とありますが、ここからは守にとつて達哉くんがどのような存在であることがわかりますか。説明しなさい。

四 ― 線④「そう思って守は記録の文章を消しゴムで消した。代わりに『青々としたにおいがした』とユリ先生が言っていたことをそのまま書き込んだ」(143～144行目)とありますが、この時点で守は自らの表現に対してどのような向き合っていますか。その説明としてふさわしいものを、次のア～エの中から一つ選んで記号で答えなさい。

ア 本当に思ったことだとしても、先生に怒られる可能性のある表現を用いてはならず、本当の気持ちは伝わらなくても、先生の反感を買わない表現を選ぼうと思っている。

イ ふざけて書いたことを発表してしまうと、みんなを失望させてしまうので、学級委員らしくあるべきだという期待に応えるためにも、先生の表現を借りようとしている。

ウ どんな内容を書いたとしても、本当の気持ちを伝えることなどできないのだから、どうせならあたりさわりのない表現にすることで、その場をやり過ごそうとしている。

エ 自分らしい表現を用いなければと思ってむりやり書いた文章よりも、大人の表現の方が現実をうまく表していることに気づき、自分の子供っぽさにうちのめされている。

五 ― 線⑤「菅平の自然にしかないもの」(179行目)とありますが、守が描きたいと思ったものは何ですか。文中から十四字でぬき出しなさい。

六 A【】(192～193行目)、B【】(196～200行目)、C【】(220～222行目)について、この場面で守はどのようなことをしようとしているのですか。目的がわかるように説明しなさい。

七 ― 線⑥「守のやさしさと達哉くんのやさしさは、一体どこが違うのだろう」(205行目)、――線⑦「お母さんの言葉が、守のやさしさの基準だった」(207行目)とありますが、「達哉くんのやさしさ」は「お母さ

んの言葉」とどのような点で違っていますか。「点」という言葉につながる形で、文中から十五字でぬき出しなさい。

八 線⑧「裏に名前と題名書いておいてね、と先生は続けたが、守は自分の絵を見直すことに夢中になっていた」(229行目)、線⑨「守はテストが早く解き終わった時と同じように、画用紙を持ってユリ先生のところに歩いて行った」(231、232行目)とありますが、この時の守の様子の説明としてふさわしいものを、次のア、エの中から一つ選んで記号で答えなさい。

ア 自分の描いた絵が先生に受け入れられるか心配になるあまり、名前と題名を書くように言われた指示をそっちのけにし、手直しを加えられる場所がないかを必死に探している様子。

イ 自分の描いた絵の仕上がり気に取られるあまり、名前と題名を書くように言われた指示をそっちのけにし、先生が満足してくれるかどうかにも意識がおよばなくなっている様子。

ウ 自分の描いた絵がどう評価されるか知りたくなるあまり、見せに来るよう指示されるのが待ちきれず、早く先生に見せて評価を確かめたい気持ちをおさえられなくなっている様子。

エ 自分の描いた絵に自信を持つあまり、見せに来るよう指示されるのが待ちきれず、他の生徒にとってもお手本になる絵だと先生からほめてもらえると気づいてはやっている様子。

九 線⑩「気づくと、守は大粒の涙を流していた」(250行目)とありますが、守が「大粒の涙を流し」たのはなぜですか。その理由としてふさわしいものを、次のア、エの中から一つ選んで記号で答えなさい。

ア これまで、学級委員としてみんなをまとめる努力をしてきたが、先生にはいじめられているのではないかと誤解されたから。

イ これまで、学級委員として相応しいようにみんなにやさしくふるまってきたが、それを先生に評価してもらえなかったから。

ウ 先生に自分の絵を理解してもらえなかったので、絵にこめた思いを説明しようと思ったが、うまく言葉にできなかったから。

エ 先生に自分の絵を評価してもらえないか不安に思いながら提出したところ、ふざけて描いたと思われ、怒られてしまったから。

十——線⑩「守は晴れやかな気持ちだった」(274行目)とありますが、泣いてしまった守が「晴れやかな気持ち」になっただけではなぜですか。D「²⁶⁹」(269～273行目)に注目して説明しなさい。

十一 この作品では、守は絵を描くことで自らの表現に対する姿勢が変化しています。それについて以下の問いに答えなさい。

(1) 自らの表現に対する守の姿勢は絵を描く前後でどのように変化していますか。説明しなさい。

(2) 自らの表現に対する守の姿勢が変化したのはなぜだと考えられますか。守が絵を描く場面(170～232行目)をよく読んで説明しなさい。

十二——線a「モ」(43行目)、b「チヂ」(147行目)、c「タバ」(172行目)、d「カクセイ」(225行目)のカタカナを、漢字で書きなさい。

〈問題はここで終わります〉

〈以下余白〉

受験番号	
氏名	

(2 0 2 4 年 度)

国語解答用紙

九	八	七	六	五	四	三	二	一

点

十二	2	十一	十

	(合計)
--	------

	(整理番号)
--	--------